

「ひきこもり実態調査の結果」について(概要)

1.本調査の目的

本市におけるひきこもりの状態にある方については、これまでその実態が十分に明らかになっていなかったことから、今後、より効果的な支援を進めるため、調査を行ったもの。

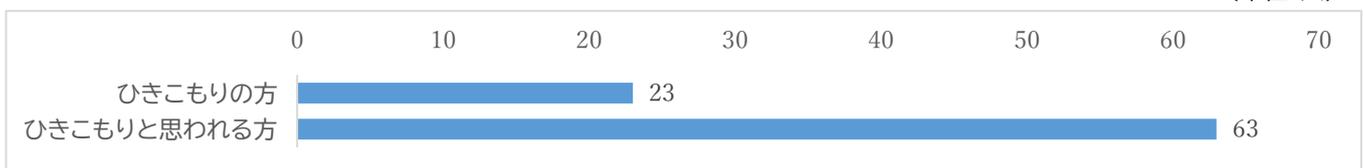
2.調査の方法

市内全域の民生委員(178人)及び当事者家族(25人)の方に協力いただき、調査票を作成・提出いただいたもの。*調査時点:令和7年9月1日

3.調査結果のポイント *調査票の回収率:約98%(民生委員調査)、100%(当事者家族調査)

- (1) 「ひきこもりの方」の人数は23人、「ひきこもりと思われる方」の人数は63人、合計で86人(出現率:約0.24%)となった(民生委員調査)。

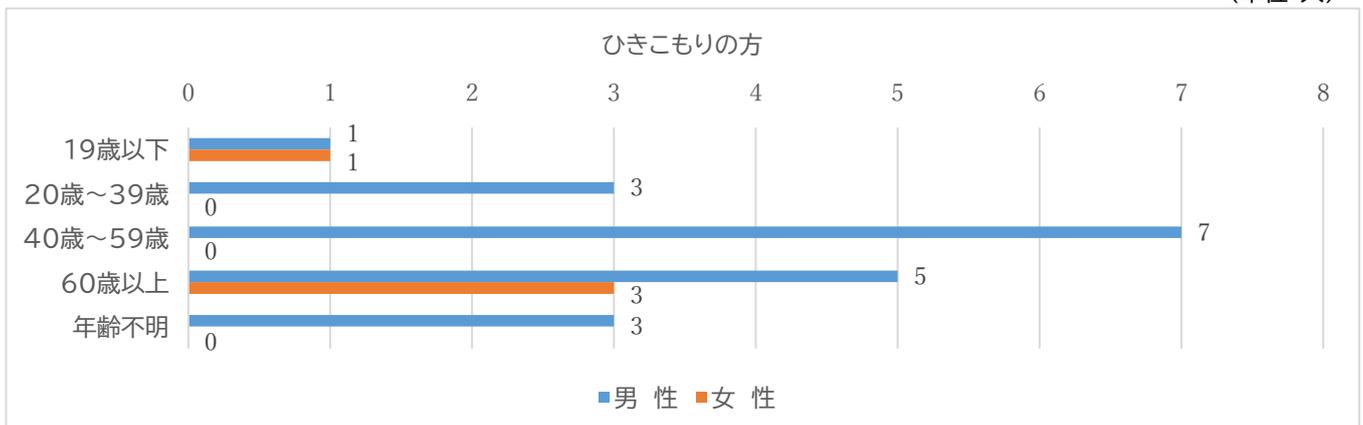
(単位:人)



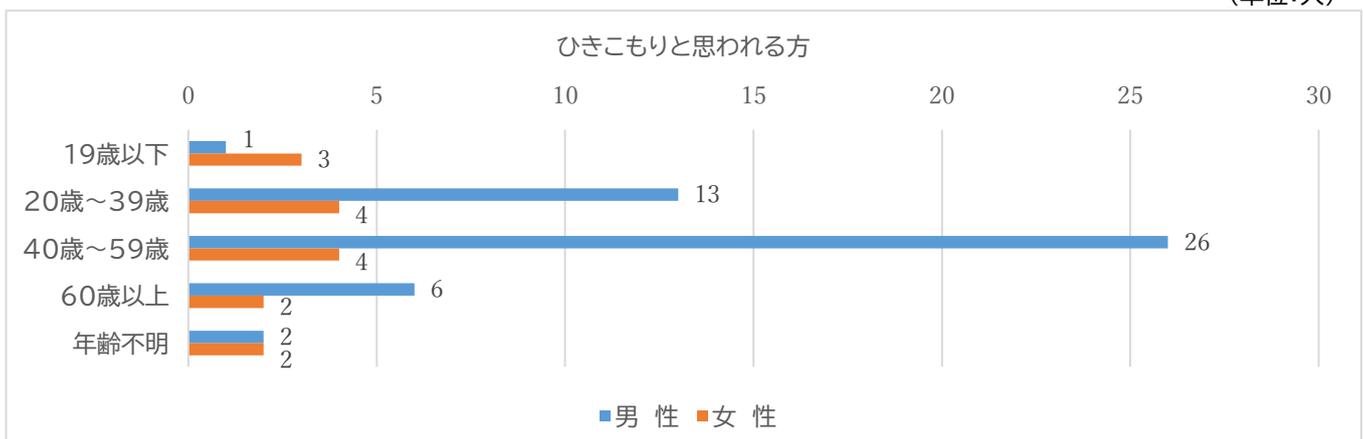
※出現率は、調査対象の日田市人口36,293人(15歳~70歳 令和7年8月31日現在)に対する割合。

- (2) 最も多かった年齢層は、「40歳~59歳」の37人(約43%)。男性の割合が約78%、女性の割合が約22%となった(民生委員調査)。

(単位:人)

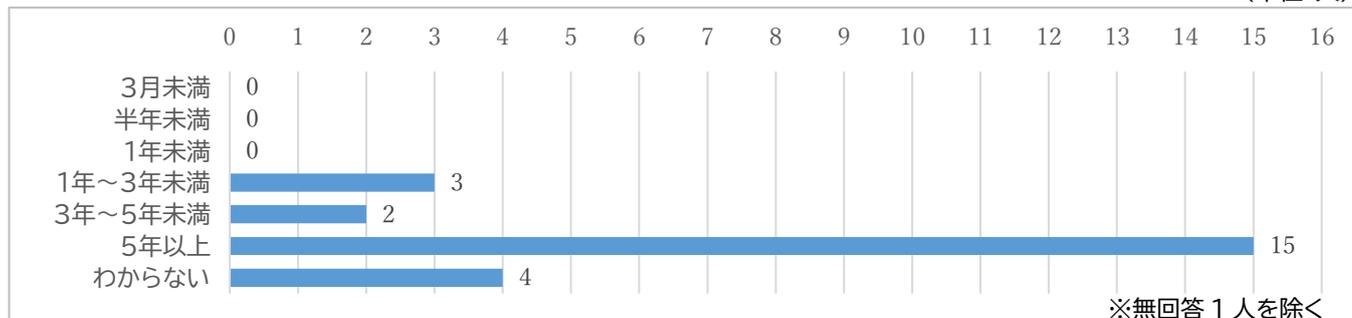


(単位:人)



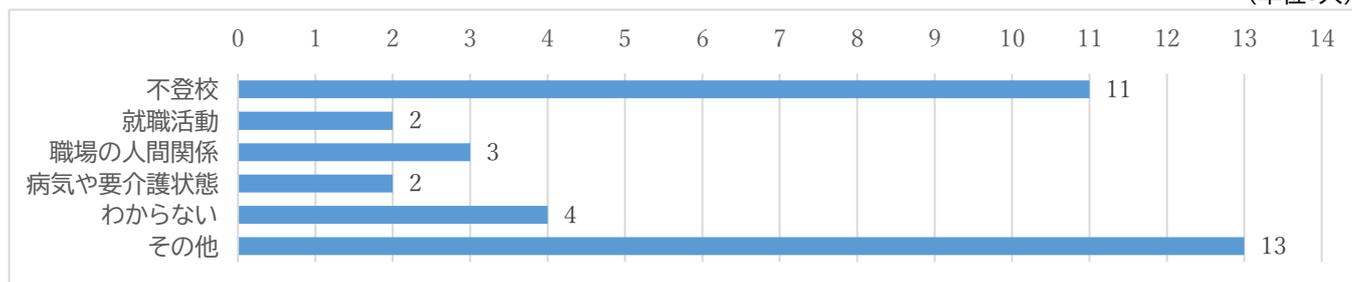
(3) ひきこもりの状態にある期間として、「5年以上」が 15 人(約 63%)と最も多くなった(家族調査)。

(単位:人)



(4) ひきこもりの状態になったきっかけとして、「その他」の 13 人(約 37%)が最も多く、次いで「不登校」の 11 人(約 31%)となった(家族調査)。

(単位:人)



(5) 民生委員・当事者家族からの主な意見(自由記載)

(民生委員より)

- ・ ひきこもり状態の家族や本人から信頼を得ることは難しい。
- ・ ひきこもり状態らしいと近隣の方からの情報があっても、当事者と会うこともできず、状況の把握ができない。近隣の方からは、夜になると明かりがつくので、元気らしいということだけ。姿を見かけることもないらしい。どこまで立ち入って良いものか。立ち入るべきなのか疑問である。
- ・ 本人の社会復帰や自立のためにはサポートが必要だと思う。専門的なアプローチが絶対必要。家族の方にも安心する場が欲しいと思う。
- ・ ひきこもりと他のトラブルとが複雑に絡み合っていることが多い。地域でどう関われば良いか。当事者がどのような関わりを望んでいるかは人それぞれで、一律に判断できない。居場所についても、安心できる場所かは一人ひとりで違うと思うので難しいと思う。でも必要な場所だと思う。これからの大きな課題だと思う。

(当事者家族より)

- ・ 本人の意思を尊重しながら、少しでも本来の自由さを取り戻してほしい。親が亡くなるまでに、自分が必要とする助けを求めたり、自分で何とか暮らしていけるように導けたら良いと思う。
- ・ 一人ひとり、背景も、性格も、思いも違う。通り一偏の支援ではなく、各人の状況を知り、それに応じた支援を根気よく長期にわたって、できれば同じ方が(2人くらいでも)支援に携わってほしい。
- ・ 本人や本人の親・身近な人に「ひた生活支援相談センター」に相談に行くように進める。センターが、いろいろな人の支援や相談を受け入れ、伴走型支援ができるように専門性を高め、人の体制を整えてほしい。
- ・ 本人が、人間が嫌いだと言い、人に会うこと、家に人が来ることを嫌がるので、どのように支援してもらえば良いかが分からない。医療機関にも行けない。
- ・ それぞれが、自分とは違った個性や悩みを持ち、懸命に生きていることを想像して、自然な手助け、優しい声掛けができれば、本人も周りも心が軽くなり、生きやすくなるのではと思う。